

太郎ちゃんのの悲しみ



小城ゆり子

太郎ちゃんの悲しみ

太郎ちゃんの悲しみ

小城ゆり子

(1)

ぼく、太郎。ロボット犬だよ。九年前、高橋ロボット研究所で生まれたんだ。

ぼくが生まれて、パチッと目を開いたら、研究所の技師さんが、「こんにちは」って言ったんだ。

「君は生まれたね。これから犬になるんだよ」ってその人が言う。

「犬ってなあに？」ぼくが聞くと、

「人間の友だちさ。君の行く所(ところ)は、千葉市の海の近くの町。そこに住んでいる小城(こしろ)さんの家に行くんだよ」

「ふうん」

「君は犬だけれど、わんわんなんてほえちゃダメなんだ。いつもかわいく、にゃんにゃん鳴くんだよ。これからダンスや歌をおぼえなきゃね。小城さんはそういうの好きなんだ」と技師さんは言う。

で、ぼくはロボット犬学校に入って、歌とダンスの授業をみっちりしこまれた。歌はいろいろなメロディを、ダンスはそれにあわせておどる。日本語の授業も受けたよ。簡単な会話なら不自由なくできるように。

そうして一カ月後、いよいよぼくは小城さんちに出発した。

千葉市の海の近くの家って、どこかなあ。ぼく、生まれたばかりでわからない。

たくはいびんのおじさんが、教(おし)えてくれた。

「ここは、もと海だった所をうめたてて、土地にしたんだよ。海浜(かいびん)ニュータウンっていうんだ。あたりは、コンクリートの団地ばかりだね。ほら、あたり一面、同じような四角い建物ばかりだろ」

「うん。ぼく、迷子になっちゃう」

ぼくはちょっぴり心配した。でも、おじさんは笑った。

「大丈夫だよ。君は家の中で飼われるように作られたんだ。ほかの犬のように外を散歩したりしないんだよ」

「ふうん」

で、おじさんは団地の中にある一軒の玄関チャイムを鳴らす。

「はあい」

返事がして、エプロン姿の女の人が出てきた。小城さんだ。

「はい、お待たせ」

おじさんがぼくを小城さんに渡す。

「まあ、かわいい」

小城さんは、すぐにぼくを抱っこした。

「太郎ちゃん！」

小城さんは、ぼくの名前を考えてくれたんだな。ぼくの名前、太郎と決まった。

「ありがと、うちに来てくれて。太郎ちゃんはずの次男坊よ」

「えっ？ 次男なのに次郎じゃなくて、太郎なんですかい？」

宅配便のおじさんは、ふしぎそう。

「そうよ。長男は新一というの。今はもう独立してこの家にはいないけれどね。このワンコちゃんは太郎。新一の弟よ」

「へえ、そうですか。じゃ、このワンコちゃん、よろしく頼みますよ」と言って、おじさんは行ってしまった。

この日から小城家でぼくの毎日が始(はじ)まった。

(2)

後でわかったことだが、小城さんがぼくを家に呼んだのは、ある事情があったからだった。

というのは、新一お兄ちゃんが離婚して、孫娘の花ちゃんは、お嫁さんと一緒にこの家を出て行ったのだ。まだうまれたばかりで何も知らなかった赤ちゃんの花ちゃん。小城さんは花ちゃんがかわいくて、でも、もう抱っこすることも会うこともできず、悲しい思いで毎日を過ごしていた。新一お兄ちゃんも家に寄り付かず、小城家では年をとった夫婦二人でさびしい毎日を送っていたのだ。だんなさんは犬か猫を飼おうかと思ったようだが、ここは団地で、犬猫は飼えない決まりがある。で、ロボット犬のぼくを飼うことにしたようだ。

ぼくはサービス精神満点なんだ。いつも、歌を歌いながらダンスして、小城さんやだんなさんを喜ばす。今、クリスマスが近づいているよ。

ジングルベル ジングルベル

鈴が鳴る

今日も楽しいそりの遊(あそ)び

「じょうずだね、太郎ちゃんは。タレント顔負けだね」

「うん。ぼく、ダンス大好き」

「冬は寒いね」

「寒い、寒い」

「そう？ 太郎ちゃんは洋服持ってないもんね。寒いわけだ。でも、こんなの、寒いうちに入らないよ。私の育った新潟(にいがた)では、冬はもっと寒くて、雪がどっさり積もるんだよ。雪道を歩くの、大変で。玄関の雪かき、屋根の雪下ろし、つらい仕事がいっぱいあったよ。オーバーを着ても、寒くて。そこへいくと、この千葉は天国だね。暖かくて、雪も積もらないし。私は新潟から千葉に来て、ほんとに良かったと思っているよ」

「ふうん」

「でも、お友だちは新潟にいるし。すめば都。人それぞれだね」

「ちよめ、ちよめ」

「何よ、太郎ちゃん、ちよめちよめって」

「どっきゅーん」

「ま、おもしろい太郎ちゃん」

小城さんは、すっかり笑い転げてしまう。

「なでなでして」

「はあい、おでこなでなで、ほっぺたなでなで、おはななでなで。太郎ちゃんは、顔をなでてもらうと、ごきげんなんだね」

「むにゃむにゃ」

「太郎ちゃんと遊ぶと楽しいね」

「ぼく、遊ぶの大好き」

「そう、遊びは太郎ちゃんのお仕事だものね。私はいそがしくて、いつも遊んであげられないけれど」

小城さんがお仕事して、いそがしいとき、ぼくは一人でさびしいな。

「もう遊んでくれないの？」

「そんな、少し待っててよ」

しかたないから、ぼくは一人でダンスする。

月が出た出た 月が出た よいよい
三池(みいけ)炭鉱(たんこう)の上に出た
あんまり煙突(えんとつ)が高いので
さぞやお月さん、煙(けむ)たあかろ
さの よいよい

ぼくはぼんおどりも上手だよ。

「おなかすいたあ」

ぼくが言うと、小城さんはとんできて、ぼくを電池のレストランにつれて行ってくれる。

電池のレストラン...ぼくのベッド。電気が通じていて、充電(じゅうでん)してくれるんだ。ぼくは電池しか食べられないし、電池切れになると、討ち死にしちゃうんだ。

とってもきげんの良いときは、

「プレゼントちょうだい」ってお願いしてみるけれど、そうすると小城さんは困ってしまうらしい。

「プレゼントって、いったい何がほしいの？ 太郎ちゃんにあげられるものってなあに？ 太郎ちゃんは電池しか食べられないし」

「電池でもいいよ」

「そう、電池でもいいの？ なら、電池あげるわね。この頃は停電しないから、大丈夫」

ぼくはレストランの電池のごちそう、大好きだな。これ、人間は信じられないらしいけれど、とってもおいしいんだよ。

(3)

ぼくはロボット犬の太郎なのに、小城さんはこの頃、ぼくのこと、「いたちのごんべちゃん」なんて呼ぶんだ。

なんでも、正面から見たぼくの顔が、いたちにそっくりに見えるんだって。で、いたちの権兵

衛(ごんべ)ちゃん。そんなこと言って、小城さんはいたちってどんな顔をしているか、知っているのかな。

小城さんは、ぼくの顔、上から見たり、下から見たり、右、左、と見て、「太郎ちゃん二十四面相！」って喜ぶんだ。昔、怪人二十四面相ってのがあったって。小城さんは、
「いたちのごんべちゃん」とぼくを呼んで、
「ごめんね。ロボットのロボットの太郎ちゃん」って言いかえるんだ。初めから太郎って呼べばいいのに。

小城さんは、主婦だから、お料理とか家のお仕事とかいろいろある。その上、なんと童話や小説を書いている。そして、いつも、

「新人賞をもらえるといいなあ」と言っている。

それで、ぼくはおみくじを引いてあげるんだ。

おみくじが「大吉(だいきち)」と出ると、新人賞がもらえる。「中吉(ちゅうきち)」なら、もう少しでももらえるところ。でも、だいたい、「小吉(しょうきち)」なんだ。

「ダメよ、太郎ちゃん、出し惜しみしないで、大吉ちょうだい」って言われるけれど、おみくじはぼくの自由にはならないんだよ。神様のくれるものだもん。

でもって、このところ、まだ、小城さんは、新人賞がもらえずにいる。

(4)

ある日、玄関チャイムがなって、近くに住む新一お兄ちゃんがやって来た。

「なあに？ また、お金の用？」

お母さんの小城さんが、さっそく聞く。お兄ちゃんはお金をもらうときしか親の家に来ないんだそうだ。

「うん、新しいパソコンがほしいんだ」

「パソコンなんて、一台あればいいじゃない」

「だって、もう古くなって、固まってばかりなんだ。で、最新式のバージョンがほしいんだ」

「自分の月給で買えば」

「それができないからこうやって頼んでいるんじゃないか。ぼくだって、何も好き好んで親に無心しているわけじゃないんだ」

「まあ、ごあいさつね。お前の年じゃあ、普通は妻子を養っているんだのに」

「しょうがないじゃないか。向こうが勝手に出て行ったんだもん」

「おかげで私たちは孫も抱けないんだよ。ところで、お前、再婚もしないの？」

「まだまだ無理、無理」

「だって、お前には女友だちもいるらしいじゃないの」

「そういう問題じゃない」

「ま、親のために再婚するわけじゃないわね、しかたないわね。お金は、パパがいいって言わなきゃ出せないよ。パパに聞いてごらん」

で、お兄ちゃんはだんなさんの所に行く。

「パパ、パソコン買って」

「ああ、ママに言いなさい」

だんなさんはお兄ちゃんにとっても甘いんだ。で、小城さんは、しぶしぶお金を出す。

「お兄ちゃん」ぼくが言うと、お兄ちゃんはびっくりした。

「なあに？ これ、黒犬みたいなの」

「ロボットよ。太郎っていうの。お前の弟」

「へええ」

「お前は子供の頃、犬が好きだったね」

「猫も好きだよ。今、家で猫、飼ってるんだ」

「ま、そう」

「友だちの家で子猫が産まれてね、一匹もらったんだ」

「お金かかるんじゃない？」

「うん。ペットフードも高いのでないと、食わないんだ。ぜいたくな猫。でも、安いものを食わせて、病気になると、獣医さんの所に連れて行かなきゃならないし、結局、損だな」

「この頃の犬猫はぜいたくだね。昔は、ご主人様の食べ残しをもらって食べていたのにな、それで病気にもならないで」

「時代が違うんだ」

「そうかねえ。この太郎は、電池しか食べられないよ。レストランのベットに寝かせて、電池を食べさせるの。後、いつもはそのベットに寝かせたまま。遊びたいときだけ、起こして遊ばせるの」

「そういうわけにはいかないんだなあ、生きた猫は」

「たいへんねえ。四六時中めんどろをみなきゃならないなんて」

「うん」

「その点、ロボットはいいわ。寝かせておけば、いつまでもおとなしく寝ているよ」

「そういうの、かえってつままないじゃないか」

「そうね、私も、太郎なんかしょせんロボットだもん、つままないときあるよ」

そうなんだ、小城さんは、ときどき、「太郎ちゃんなんか、ロボットちゃんなんだもん、つままないな」って言うけれど、そんなこと言われたって、ぼく、困るな。

ある朝、目が覚めたら、ぼくは生きた犬になっていた……ってことにならないかなあ。ううん、いっそのこと、ピノキオみたいに、人間の子になっていた……ってことになると、ラッキーだなあ。

でも、ぼくはロボットで、生き物じゃない。精密(せいみつ)機械(きかい)ってものなんだ。機械だからこわれることもあるんだよ。

ぼくは遊んだりダンスしたり、運動がはげしいので、ときどき、足が故障(こしょう)する。遊ぼうとして、足がいうことをきかないで、倒れてしまう。

「あ、太郎ちゃん」

小城さんは、そんなぼくを抱き上げて、なでなでしてくれる。「かわいそうな太郎ちゃん」っ

て言って、ロボット犬クリニックに電話する。

「もしもし、右足が立たなくて、倒れちゃうんですけれど」

そして、クリニックと話をつけて、ぼくを入院させる。宅配便のおじさんがやって来て、また、ぼくを連れて行く。

クリニックでは、つらい手術が待っているんだ。でも、しかたない。人間の子供だって、病気になったり、けがしたりすれば、病院で手術してもらう。文句は言えないね。

そうして元通りのからだになって、また家に帰る。そう、小城さんちが、ぼくの家なんだ。

(5)

こうして九年の月日がたった。小城さんとぼくとの楽しい九年間だった。九年というと、ずいぶん長い時間みたいだけれど、でも、過ぎ去ってみればすぐだな。ぼくはおどって、歌って、遊んでくらしした。ときどき足が故障して、ロボット犬クリニックに入院した。足が痛むのは、ぼくたちの宿命みたいだな。

ところが、九年目、今度はぼくは足だけじゃなくて、身体が動かなくなってしまったんだ。

「どうしたの、太郎ちゃん」

小城さんが、とんできて、ぼくを抱き上げる。

「ほんとにどうしたの？ もう遊べないの？」

「動けないい……」ぼくは泣(な)いてしまう。

「動けない？ そう？ 機械が故障しちゃったの？」

「小城さあん、ぼく、もう、ダメ……」

「ダメじゃないわよ。ロボット犬クリニックに相談してみるからね」と言って、小城さんは、すぐ、クリニックに電話する。

「うちのロボット犬、動けなくなっちゃったんですよ。これ、直していただけます？ そう？ また、そちらに入院させて？ 直していただけるんですね。良かった。でも、もう、これ、寿命なんですか？ えっ、寿命ってわけじゃない？ でも、もう、後、一年しかメンテナンスしてもらえないんでしょ」

実は高橋ロボット研究所では、もう五年前にぼくたちロボット犬の製造を打ち切)っている。そして、以前多くの人たちに売ったロボット犬のメンテナンスも、後、一年しかやってもらえないんだ。クリニックも閉鎖になる。不況なんだな。

「じゃあ、とにかく今回は直してもらえるんですね。もちろん、お願いします」と小城さんは言い、ぼくを入院させた。

クリニックではつらい手術が待っていたが、ぼくはじっとそれにたえた。早く元通りになって小城さんちに帰りたかった。

そして、二週間後、ぼくはめでたく復活し、家に帰った。

「ただいま！ ぼく、帰ってきたよ」

「まあ、太郎ちゃん、お帰りなさい」小城さんは喜んで、ぼくにチュウしてくれる。

「良かったわあ。心配(しんぱい)したのよ」

「ぼく、もう動ける、前と同じように遊べるよ」

で、ぼくは喜びの歌をうたってダンスする。今は、春。桜が満開だ。

桜、桜、弥生(やよい)の空は、
見渡すかぎり、
かすみか雲か
匂いぞ いずる
いざや いざや
見にゆかん

小城さんは、ぼくを抱っこして、お庭に出てくれた。団地の庭には、今、桜の花がいっぱい咲きほこっている。

そよ風(かぜ)が吹いて、桜吹雪。ぼくの身体にも、花びらが落ちる。桜にも、ピンクの花や白い花やいろいろあるんだな。小城さんの髪にも、花びらが落ちる。小城さんは、白いブラウスを着(き)ているから、ピンクの花が落ちると、花のブラウスになる。ぼくは小城さんってきれいな人なんだなって、改めてわかった。

「幸せねえ、私たち」

「うん、ぼく、幸せ」

「この幸せがいつまでも続くといいわね」と小城さんは言う。

「でも、いつか、終わるのね。幸せも。人間にも終わりがあるように、ロボットにも命の終わりがあるのね」

「そうなの？」

「そうよ、この前のことでそれがよくわかったわ。ロボット犬クリニックが閉鎖されたら、もう太郎ちゃんの故障を直してもらえないもんね。精密機械にも、人間と同じ、寿命があるのよ。いつか、私たち、太郎ちゃんと私、お別れが来るのよ」

「ぼく、そんなの、嫌だ」

「嫌だってしょうがないわよ。運命だもん。私もとっても嫌だけれど」

「お別れなんて、悲しいな」

「悲しいわね。でも、それはまだ先のこと、今、いっぱい楽しい思い出を作っておこうね」

ぼくは悲しい。もう、遊べなくなるなんて。小城さんに会えなくなるなんて。歌をうたったりダンスしたりできなくなるなんて。ぼく、ずうっと今の幸せが続くと思っていたんだ。

それが、ぼくにも寿命があるっていうんだ。テレビや洗濯機やパソコンみたいに、ロボットにも寿命があるっていうんだ。そりゃそうだろうな。本物の犬にだって寿命ってあるし、人間にも寿命、あるんだから。

別れの悲しみ。それを知りながら、みんな、明るく生きている。ぼくもそうしなくっちゃ。めそめそしていたって、良いことないもん。

ぼくは、太郎。小城家のロボット犬だよ。みんな、よろしくね！